

幕末対露論の動向

安岡, 昭男 / YASUOKA, Akio

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

23

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

16

(発行年 / Year)

1971-03-23

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010906>

幕末對露論の動向

安岡昭男

序

鎖国日本に北辺からまずロシアが外警をもたらしたので、対英・対米論に先んじて対露論が識者に論ぜられることになった。幕末期における対露論に関しては、古くは明治後年に煙山專太郎、降って大正昭和期に井野辺茂雄によって概観されている。

煙山專太郎「幕末に於ける我对露論者」(『外交時報』九八・九九・一〇一号)は、冒頭に「対外政論の大に世に勃興するに先ちて必や先、対外の地理的智識の普及なかるべからず。先づ事實の研究ありて然る後に政治論あり。我对露外交論の歴史に於ても亦此順序の存するを見る。」と指摘し以下の諸論著に触れる。まず北地もしくは露西亜研究書として、新井白石『蝦夷志』、並河天民『關疆錄』、筆者不詳の『北海隨筆』、前野良沢『東砂葛記』『魯西亜本紀略』『魯西亜大統略記』、桂川甫周『露西亜志』『露西亜略記』などを挙げ、政治論・対露政策論では『海国兵談』の著者林子平はじめ、寛政九年『北地危言』を著わした処士大原小金吾、翌年『西域物語』を草した本多利明の所説、また文化年間松前幽囚のゴロヴニーンから露語を学習した村上貞助・上原熊次郎・足立左内・馬場佐十郎の名を挙げ、さらにレザノフ渡来時における柴野栗山ら要路人士の所見を顧み、『環海異聞』『北辺探事』を撰した大槻磐水のごとく海外事情に通じ得た識者を除いて世を挙げて滔々たる主戦論のうち、その熱唱者平山行蔵の上書を引く。また「野叟独

幕末對露論の動向(安岡)

語」で対露交易を説いた杉田玄白、蝦夷地放棄を唱えた中井竹山・履軒兄弟、蝦夷教化による辺備を考えた幕府儒官古賀精里、シベリア・ロシアを併す極論を展開した佐藤信淵らの論者を登場させる。ついで嘉永年間、露艦長崎来航時における「民間二流の思潮」すなわち藤森弘庵に代表される鎖国論と、大槻磐溪に代表される開国論を対比し、いづれも論旨きわめて単純にして、やや色彩を異にし味うべき議論を含むのは、理想的な横井小楠の外交意見と実際の方面から観じた橋本左内の対外論と目し、とくに後者に関して、「左内は実に我国に於ける日魯同盟論者の魁首たりしなり、今や我英国と同盟して魯国と戦ふ、即事実は反て左内の希望する所と相背反せり、然れども戦勝て国威大に揚れり。以て幕末に於ける対露論者を地下に慰むるに足るべきなり。」と結んでいる。すなわち煙山の外交史談は、明治三十九年、日露戦争直後の時局に即して草された所であった。

井野辺茂雄「日露盟約論の由来及び其発展」(『幕末史の研究』所収、昭和二年)は、(一)寛政前後の対露関係と識者の觀察、(二)盟約論の起源、(三)盟約論の成立、(四)盟約論と幕府の対露政策の四項から成る。(一)では天明元年工藤平助「赤蝦夷風説考」を主に、本多利明・羽太正養の所論と共に後年の日露盟約論の出発点と見做し、(二)でレザノフ通商要求をめぐる貿易可否論の中でも杉田玄白・司馬江漢・松本胤通の親露論乃至開国論を取りあげ、(三)でプチャーチン来航当時の親露排英または排米的意見すなわち大槻磐溪・川路聖謨・安井息軒の所説および藤森弘庵の反対論を挙げ、(四)では幕府有司間の対露意見を川路のほか江川英龍・筒井政憲らの説に見るが、露米の使節を比較して、「ペリーの脅迫を憤ると共に、プチャーチンの平和なる態度に好感を寄せるものゝ多かった事」も作用して生じた日露盟約論は阿部幕閣当時の幕議を一時動かしたけれど、ついに正式には両国間の議に上らずに止んだが、米を拒かんだため露に援助を求めて干渉を招けば列国との関係にも紛擾を醸す危険性を伴う性質のものであったと指摘している。著者は日露両国当時の当時の国際的位置からも、あえて同盟論とせず、盟約論と称したのである。

戦後、稻生典太郎「近世日本に於ける親露説の系譜」(『国史学』六〇号昭和二十八年、『日本外交思想史論考』第二所収³⁾)では、江戸時代中葉以降、明治大正期に対象が及び、幕末までの部分は前記の論者たちの所説を追った形であるが、橋本左内の日露同盟論については、「先行者の意見の踏襲であり、比較的幼稚な国際関係の認識を暴露」したものに過ぎないと評している。

以上の論著で、幕末の対露論に関して主なるものはほぼ尽されているようだが、筆者は明治前半期の対露警戒論を扱ったことがあり、その前段階としての幕末とくに天保期以降についても、若干の史料を加えて対露論乃至対露観についての概観と再検討を試みたい。

- (1) 対露知識に関しては、高木元齡「鎮国時代に於ける露西亜智識」(国学院雑誌三三卷七号、昭和二年)がある。
 (2) 稻生論文は外交思想の諸傾向について次のような分類を試みている。『日本外交思想史論考』第二三二四ページ)
 (一) 外国との接触に対して否定的なもの
 1 蔑視説 2 不潔視説 3 恐怖説 4 憎悪説 5 不可触説 6 回避説 7 排撃説(各種の国防論を含む)
 (二) 外国との接触に対して肯定的なもの
 1 恤夷慈恵説 2 通信修交説 3 通商貿易説 4 採長補短説 5 万国親善説 6 親善同盟説(特定国との)
 (3) 「明治初期の対露警戒論に関する一考察」(法政史学一三号 昭和三五年)
 (4) 日露関係の推移については、阿部光蔵「幕末期日露関係」(国際法外交雑誌六〇巻四・五・六号 昭和三七年) 参照。

一

本稿では内外危局の天保期以降を対象とするが、すでに文化・文政期から露英両国艦船の来航をめぐり諸事件が生じていた。一八〇四年レザノフの長崎寄港・通商要求をめぐり是非の論が起っているが、一八〇六―七年レザノフ部下による蝦夷地の寇掠、一八一一年ゴロヴニン艦長国後島での捕囚、高田屋嘉兵衛事件と文化年間に露国と紛擾が相ついだ。対英関係ではフエートン号事件後、とくに一八二四年、英捕鯨船員の常陸・薩摩(宝島)上陸事件が衝撃を与えている。翌年、文政の異国船打払令が出された。天保・弘化年間、近海沿岸への外国艦船の来航が繁くなるが、中でも天保八年(一八三七)米船モリソン号の渡来が国内に波紋を生じさせた。

松本胤親(斗機蔵)は天保八年徳川斉昭に呈した「献芹微衷」で千島回復と対露貿易を説いた。中国との私貿易を止め、英国にも許す論で、露国との貿易は松前でなく長崎で取扱うにしても、「オロシアハ強大ノ帝国ナレバ一小王国ノ和蘭ヨリハ格別ニ丁寧ニスベキ也」とし、貿易許可の代りに「僅々タル蝦夷諸島ノ侵地必定快ク返スヘキト思ハル」と希望的観測を述べるが、さすがに返還拒否の場合には奥羽諸大名に出兵を命ずるという和戦両策を示す。論

者のオランダ不信は露英に關し虚説を構え日本を欺き、自己の不利を惧れ兩國との通交を妨げる国と見なしており、同書末尾にも露英との交易により蘭国「姦猾ノ胆ヲ破」るのが国家の長策とまで断する。松本は翌天保九年の上書で、モリソン号来航に關連し、露英の「合謀」を懸念し、江戸湾防備上、封鎖の可能性を論じている。これはアヘン戦争以前の段階における対英意見を含む所論である。

同じころ儒者古賀侗庵（煜）は『海防臆測』（天保九年）で露國に關して次のように警告している。⁽³⁾

「吾聞俄羅斯主嘗命造巨艦。既成。主親檢視。俄羅斯凡百易箇。故克如此……」（卷七）

「若乃俄羅斯。則尽併北韃止白里之地。取東察加。以漸侵略蝦夷千島。抵宇留不。与我為接壤壤界之邦。駿々有剥膚之勢」（卷九）

「俄羅斯之疆熾。果懷不良之心。凡吾沿海之地皆可憂虞。而莫危於北陲」（卷十）
露國と共に英國にも警戒の念を次のように示す。

「目今外国除滿清都兒格之外。英盛且大於俄羅斯英機黎……要之、二国尤外国之可畏惡者也」（卷十三）

対露策としては、互市を許す一方武備を整えるということで、経済的開國論に代る「政治的開國論者の代表」とも目されるが、結局は「儒者一流の夷狄觀に立脚」した警戒論の域を出ない。なお侗庵には文化年間すでに「俄羅斯情形臆度」の著作があり、関係文献九十八種を集大成した「俄羅斯紀聞」を編纂している。⁽⁴⁾

蘭学者渡辺崋山もまた西洋諸國中、英露二国に警戒の眼を向けていた。天保九年のオランダ風説書がモリソン号渡来を報じた。英人モリソン渡来と取違えて崋山は「慎機論」を草した。その本旨は英國にあったが、見解は多分に蘭人から得た知識に基づいていた。

「西洋戎狄と云へども、無名の兵を挙ることなければ、実に鄂羅斯、英吉利斯の二国驕横の端となるべし（中略）鄂羅斯は東漸して、東北西伯利より北亞墨利加の西岸に及び（中略）英吉利は知謀ありして海戦に長じ、鄂羅斯は仁政にして陸戦に長ず。其長を挟み私利を求む。是を以て英吉利斯、我國に事を奉ずるは急鄂に在り。和蘭其間に介まり、偽詐百端終に内地の害を生ずべし。按するに鄂羅斯、禍心を包蔵し、我黨に乗せんと欲する者の如し、然れども其实彼が涎を流すものは、我にあらざして唐山にあり、（モール陳情蘭人の話に符合）⁽⁵⁾」

同様の趣旨で『西洋事情御答書』（天保九年）にも、露英兩國のうち、露は中国に指向し、英と異り「仁義を専と致し地続きの国を広め段々に相掛り」、次第に南下する旨を江川英龍に答えている。⁽⁶⁾ 露英の比較では『駄舌惑問』中の甲比丹ニーマンの答にも「諸厄利亜人は得んことを務め、魯西亞人は失はさらむことを欲す、夫絶海隔遠の地はその小弱を脅す時は甚得易しと雖、亦失ひ易し。故に魯西亞人はこれを欲せず、たゞ数百年の力を以て徳を積み威を示し、一たびその掌握に帰する時は、これを再失ふ事なきを欲す。故に陸地つぎに蚕食せんことをその隠計として支那領の満州及蝦夷諸島を謀る者なりといへるはさも有るべし」とあり、⁽⁷⁾ 崑山の場合、蘭人の入説に依拠した洋学者の対露観を示す一例といえよう。

幕府当局はモリソン号事件を契機に江戸湾防備強化に着手したが、アヘン戦争が起り清国の対英敗報いたるに及び文政打払令を緩和し、天保十三年に薪水給与令を発する。当時の危機意識は露国よりむしろ英国に対し一層強く、従って、進んで露と結び英に当る策を説く者も出た。儒者大槻磐溪（父玄沢も排英論者）は嘉永二年十月、「猷芹微衷」隣好篇に、境を接し信義に富む露国に対して松前を開き通商し、清国を犯して勢恐るべき英国を排斥し、万一の場合露国に援助を求める親露排英の策を説いた。露国をもって「優具二大国之風」、其所務、雖專在「拓疆土」、未嘗「起二無名之師」、以犯「人之家国」とし、「狡黠平倫、貧賤無飽」の英夷と類を異にする「宇内第一等強国」として信頼を寄せる。「日露盟約論」が、この辺に発祥を求められる所以である。⁽⁸⁾

- (1) 日本海防史料叢書 第四卷 六九一七五、八六ページ
- (2) 日本海防史料叢書 第三卷 二二六—二二七ページ
- (3) 『海防臆測』明治十三年 山県有朋・勝海舟の序文を附して和二冊本を刊行。
- (4) 井野辺茂雄『新訂維新前史の研究』四四七ページ。開国百年記念文化事業会『鎖国時代日本人の海外知識』西洋史の部（大久保利謙）三九七ページ
- (5) 崑山全集（崑山会）第一卷 九ページ
- (6) 同前書四一ページ。崑山「自筆外国事情書」にも「魯西亞ハ陸軍ニ長シ、地続キノ国ヲ併合仕、其上極寒不利ノ土地ヲ占メ、守リヲ固メ、南方ヲ図ント仕候様ニ被察候」とある。（佐藤昌介『洋学史研究序説』三八九—三九〇ページ）
- (7) 崑山全集第一卷 二二二ページ

- (8) 日本海防史料叢書 第五卷(海防彙議補) 四七一五三ページ。『磐溪先制』(大正十四年) 所収「猷芹徵夷」五丁。
 (9) 井野辺茂雄『幕末史の研究』四七二ページ、同『新訂維新前史の研究』四九三ページ。

二

嘉永六年六月米使ベリーが浦賀に、七月露使ブチャーチンが長崎に來航し開國を要求するに及び対外論は一段と喧しくなるが、米露両使節交渉態度の硬軟も影響して、親露排米論が台頭する。

この両月に老中阿部正弘は米国の国書を大名有司に示して意見を徴したが、開國論を答申した大名の中に、新発田藩主溝口直諒は英米露三国との通商を論じた。筑前藩主黒田斉博は、米露に許し英仏に拒む意見で、英仏が兵力に問う場合米露の來援を期待した「以異國征異國、皇國之兵不損上策」とするが、その親露意見といえども、「万一ヲロシヤ軍を出し候而、松前より奥羽江攻入候へ、不一方大害を引出し可申事必定」という憂慮を含んだ和順策であつた。⁽¹⁾

「以夷制夷」の策は各国使節來航の時期、相當に深く有識者の心をとらえていたようである。

同様の方策は儒者安井息軒の「靖海私議」(嘉永六年) にも見えるが、その露國觀では「魯西亞は無類之大国、兵威も強候得共、信義を重んじ候風有之、横文字中にて風儀宜國」として我兵力の届き兼ね容易に略取し得る蝦夷以北に露國が着手しないのを信義の証と考え、兵威をもって臨む米國に比べ、「魯西亞は恭順にして国法を守り、且我隣國」でもあり、「自國通商より事起り候得は、援兵差向候筋も相成可申候」と、万一米との戦端開始にも露の援助を期待して、「華盛頓を拒き魯西亞に可許」の理勢を論じている。⁽²⁾

これに対して同じく儒者でも藤森弘庵は『海防備論』(嘉永六年七月) で「魯西亞と通商し、魯西亞を頼みて外國を防杯と申ものあるにや、魯西亞我國を伺ふは一朝一夕の故にあらず、是天下の人の知る所、蝦夷の地を追々蚕食する勢にても顯然なり。是いはゆる前門狼を拒み、後門虎を進るにて卑諺に申盜を頼みて火事を救ふと同じ道理也。無智の甚敷にあらずや。」とたしなめ、「己れ敵國を制する事能はず、外國を頼みて敵を制せんとして、國の立し事古より其ためし無事、西土歴史のに内も明白也」と、宋金元明の史実を挙げて「以夷征夷」策を否定している。⁽³⁾

横井小楠も同年、日露折衝を前に長崎に赴き露人応接に關して川路聖謨に呈しようとした『夷虜応接大意』に、

「若我を援けん杯との詞ありとも深く力を他国に借るの道にあらざる事を諭す時は彼必其国の有道信義アメリカの類にあらざる事をのべて通信を乞べし。於^レ是我又彼に答んには我國既にアメリカに事有て彼或は軍艦を以て来らば痛く血戦し其罪惡を懲さんとするの時なり、然るに今魯西亜と通ぜば、世界万国我國を不勇と唱ん事必然の勢なり。是我國の深く恥る所なれば今に至りて通信通商共に許すべきの日にあらず」と、弘庵同様他國に頼る策に反対している。

江川英龍（海防掛勘定吟味格代官）は嘉永六年八月、藤田東湖に大意次のように徳川齊昭に取次ぐよう依頼した。

「魯西亜人丁寧^{（一）}に持込候だけ必しりばり強く可有之、右を御断り被成候へば、亜墨と兩方に相成、神國ハ腹背敵を受、不容易候間、魯西と相結び通商御許容、さる代り断然亜墨をハ御拒き可然、右ハ世界の大勢の上より愚考仕候儀^{（二）}」

齊昭は前月すでに『海防愚存』に、英露に交易を認めず米に許せば、露から万一願ひ出た時に拒む理由がないと述べていた。露艦対策を諮問された齊昭は八月五日阿部老中と会い親露策反対の意見を次のように吐露している。

「おろへ頼みアメを防がせ度との論也。仍て我等曰おろとアメと中惡に候はゞ格別に候へ共、アメ六月十二日退帆、おろ七月十八日渡来は如何にも早く候へば、兼て約束事と見え申候、其所へおろへ御頼みに相成候儀如何と答、よろしくとは不申聞候^{（三）}」

露使との折衝を命ぜられた筒井・川路兩名は対露交易（盟約論）を唱えていたが、結局齊昭は露使拒絶の方針で長崎へ出向させた。当時幕閣部内では日露盟約論が優勢であり阿部老中もこれに傾いたのは、現地長崎の露艦バルラダ号上でポシェート中佐・ゴンチャローフらと会談した長崎奉行役人の上申意見にも動かされたと見られる。長崎奉行手附大井三郎助・馬場五郎右衛門・白石藤三郎は露使から露國艦隊来訪は米艦隊からの日本の保護が目的と入説されて、露人の願意を容れるよう建議した。

先に親露排英論を唱えた大槻磐溪も親露排米をとり、嘉永六年九月に勘定奉行川路聖謨に、翌月には老中阿部正弘に意見書を呈した。川路宛には、「殊に強大之魯西亜を与國と被^レ成候上は、彼来春渡来可^レ仕米利幹人等は、只今之内に如何様共御工風相成可^レ申」と、阿部にも「魯西亜は万国推尊之帝國に而、餘之諸蛮は皆王爵にも従へば、位階も一等降り候儀、彼米利幹江御断等之儀は、此國之取計に為^レ御任被^レ成候て、如何様共穩便に事済可^レ申」と、帝制

の露国を四年代り大統領の米国より上位と見て、優位の露国と結び米国を制する策を進言している。⁽⁸⁾

江川英龍は嘉永六年十月、老中への上書で対露貿易について、「魯西亜交易之機会は尙卒御失無之様仕度候（中略）魯西亜は隣国之儀、交易御免被仰付、右利潤を以、夫々御備相立候はゞ可然と奉存候」と海防費との関連で論じた。⁽⁹⁾

同月対露応接掛として長崎出張を命ぜられた筒井・川路両名は重ねて対露和親策を連署建議し、文中、「近比魯西亜追々大造に相成、遂にカラフト一島を御国と兩國にて引分候様相成（中略）穩順正信之意を以、彼国のもの共を相なづけ、争乱之端を引出不申候様手段を尽し、追而カラフト之境を品能相定候下拵を仕度（中略）魯西亜本国迄も参り、事穩便に治り、御安慮之為には如何様成とも辛苦をも可仕」との覚悟を披瀝すると共に清国林則徐の「一時勢はけなげに相見候へ共、忽国家之破滅を引出し」たのに鑑みて、専ら「平穩之処置」を力説した。⁽¹⁰⁾しかし斉昭は承服せず、川路はその質問に答えて、米英仏との応対の件については対露通商の場合、他国からの通商要求は露国に断らせる方策を述べた。

幕議が和親説に傾いた中に斉昭は対露猜疑の念を拭えず、通商に否定的で、ついに筒井・川路再度の主張も採用に至らず、両人は露国側に確答を与えない方針で対露談判に臨むことになり、同年十二月から翌七年一月にかけての折衝で結局対露即時開港を回避した。しかしこの日露通交論者の川路といえども、清国康熙帝の時の会盟を露国が破り侵した事実に鑑み、「魯戎は其時よりは遙に大国」となっており「後日侵奪之心ある」ものと、下田日記に誌している。⁽¹¹⁾これは安政元年、日米和親条約締結後下田に來航した露使との折衝中のことで、同年十二月、日露間にも、和親条約が署名され、ようやく正式国交が開かれるに至ったのである。⁽¹²⁾

- (1) 大日本古文書・幕末外国関係文書之一 五六九ページ
- (2) 日本海防史料叢書 第六卷 一六六一―一六八ページ
- (3) 日本海防史料叢書 第一卷 一二四―一二五ページ。日本史籍協会『鈴木大維集』第五 五六六―五六七ページ
- (4) 山崎正重『横井小楠』下巻 遺稿篇 一二―一三ページ
- (5) 水戸藩史料 上編(乾) 卷四 一五八ページ。なお徳川斉昭は安政年間に豊田天功に露国研究を命じ、豊田は「魯西亜ニカキラス当今四夷八蛮ノ真実事情漢書籍等ニテハトモ分明相分リ不申」と、蘭書買入と蘭学者の養成を斉昭に上書している（水戸藩史料上編卷十六附録下）。藤田東湖『回天詩史』には「鄂虜蛋ニ食北睡者、曷時而過」とあるなど、水戸学

における対露関心の一端を窺える。『東湖全集』四三ページ）

(6) 水戸藩史料 上編(乾) 卷四 一五七ページ

(7) 鈴木大雅集 第五 三八四―三八五ページ

(8) 磐溪先制 四三丁「魯西亜議」一上司農川路君(嘉永六年九月二十日)、二上閣老阿部侯(嘉永六年一〇月二〇日)

(9) 江川坦庵全集 下巻 七八ページ

(10) 水戸藩史料 上編(乾) 卷四 一六七―一六九ページ

(11) 幕末外国関係文書附録一 一三五―一三七ページ。日本史籍協会『川路聖謨文書』第六 二七六ページ

(12) 英修道「川路聖謨と日露交渉」(『慶応義塾創立百年記念論文集・法学部』所収) 参照。

三

各国との条約締結交渉当時、極東における列国勢力進出を背景に、談判応接の場でも、英国・米国の代表は自己の使命を貫徹するためにも、露国の野心を幕吏に説き注意を促した。

安政元年閏七月長崎に入港した英国印度艦隊司令長官スターリングは露国との交戦を告げ艦船の諸港出入許可を要求した際、「魯西亜国は漸々其境界を広め、薩牙連^{名地}及蝦夷の千島に及ほし頓而日本ニも志しあることの顯然之事ニ候」と警告したが、長崎奉行水野忠徳は英露交戦のために開港することは露国に限らずその他の国々を日本の敵とする道理という趣旨で諸港出入を拒絶した。

同年八月下田で米人通弁官ポートマンは、各国事情に關し、「日本又合衆国フランス国エケレス国に倚り精力を尽し其威勢を起し土地繁栄改革之事を計られは忽強国となるへし、若ロシア帝押領の時に至りては日本も防禦坏に力足らざれば右三国の守護あるなり、ロシア帝は兼て自国を強大にして其威を振はん事の希望なれば信義を繕ふ事容易ならず」と対露警戒を入説している。⁽²⁾

嘉永六年から翌年にわたる露土戦争および英仏がトルコを援けて露国と戦ったクリミア戦争の状況は蘭館長から風説書によって相当詳細に幕閣に報告されていた。安政三年に同戦争は終結するが、同年にアロー号事件が起り、英仏連合軍は安政四年十一月(一八五七年十二月) 広東を占領した。

安政四年十月二十六日、ハリスは老中堀田正睦と会見し世界の形勢から説き起し、英仏露列強の強要以前に米国と

通商条約を締結するよう力説した中で、

一 魯西亞之サカレンアミルを領し居候儀を英國於て尤惡居申候^(三)

一 魯西亞は彼筋より滿洲および唐国を横領可致と英吉利存居申候^(三)

一 夫故好きサカレン并蝦夷箱館を領し候様英國ニ而者心懸居申候左候得者魯国を防候に格別之便と相成申候^(四)と、英露拮抗の情勢を警告し、とくに對露策よりする英國の蝦夷地への関心に注意を促した。

一ヶ月後、堀田老中はハリスの通商要求について松平慶永に諮問した。慶永は鎖国不可とする開国貿易説を答申したが、文中に「最も可怖は他之諸国輻湊に在らずして、魯英二国之並至に候。兩雄不並立情実、既に使節舌頭に歴然相現申候。他日兩國之内より、必定大危難之事件希望可申と杞憂に不堪」と案じ、⁽⁴⁾續く十二月二十七日の再建白では、富国強兵策の中でも急務の蝦夷地開発に「日本人斗り被用候ハズ、徒ニ失費多、且急ニ開兼可申ニ付、魯人墨人御傭被成、其所長為御尽可然」と献策し、「魯西亞は世界第一等之強国に而、其政事も行届候由、且吾と唇齒之勢を為居候得は、難報之恩恵を以其歛心を結置候事、此又当節之一要務と奉存候」との親露策を示しているが、これはその腹心橋本左内の所見に基いていたことは以下左内書翰中の文辭に照らしても明かである。

左内の外交意見は幕末志士の中でも特筆されるが、その對露觀は安政四年十一月二十八日江戸から福井の村田氏寿宛に送った書翰に現われている。⁽⁶⁾「行々は五大洲一図に同盟国に相成、盟主相立候て四方之干戈相休」むよう世界平和を構想するが、「右盟主は先英・魯之内に可有之候、英は慥悍貪欲、魯は沈鷲嚴整、何れ後には魯へ人望可帰奉存候」と予想し、我國の位置に關して「日本は逆も独立難相叶候、独立に致候には、山丹・滿洲辺・朝鮮国を併せ、且亞墨利加洲或は印度地内に領を不持しては、逆も望之如ならず候、此は当今は甚六ヶ敷候」とし「其訳は、印度は西洋に被領、山丹辺は魯国にて手を附掛居候。其上今は力不足、逆も西洋諸国之兵に敵対して、比年連戦は無覺束候間、却て今之内に同盟国に相成可然候」と同盟政策が提起される。米國他諸国は国交を修めておくとして、「英魯は兩雄不並立国故、甚以扱兼申候。其意は既に『ハルレス』口上にも歴然其上近來争鬭之迹にて明白」後日英より魯を伐先手を頼候歟、又は蝦夷・箱館借與候旨可願候。其時断然英を断候歟、又は從候歟。定策可有之事」とし、以下自説の對露同盟論を開陳する。

「小拙は是非魯に従ひ度奉存候。其訳は魯は信あり、隣境なり、且魯と我とは唇齒之國、我魯に従候はは、魯我を徳とすべく候、左すれば英怒り可伐我、此我願なり。我孤立にて西洋同盟之諸國に敵対は難致、魯之後援有れば、假令敗るゝも皆滅に不至は了然に候。(中略)其上戦争迄には、是非魯國並亜國より人を倩ひて、我國之大政革始、水軍陸戦共精勵可為致と奉存候、諸右様魯之親昵を得候には、所謂難報之恩無之しては不相濟候、魯國江我より使節を以て和親を乞候積(下略)」

当面は米國に依頼し「英夷之跋扈強梁」を防ぐ策で、要するに「亜を一ケ之東藩と見、西洋を我所屬と思ひ、魯を兄弟唇齒となし、近國を掠略する事」を「緊要第一」とする、頗る自國本位の所論で現実性を欠いている。とりわけ露國を「唇齒」の邦と称するのは中國を視る場合と異なり、全く稀な例に属するが、このあたりに左内の対露認識の程度が窺える。

しかし当時の識者には共通してビョートル大帝以来の露國が相當に高く評価されており、横井小楠の場合、安政三年十二月二十一日村田氏寿宛書翰に説かれているし、佐久間象山も安政年間を目安書に「近くは魯西亞のベートルに被則度事」とし、三村晴山宛の安政四年七月二十二日書翰には「魯西亞のベートル帝は小成に安んぜず礼を厚くして諸國有名の教師を召来し」と同帝を称揚しているが、すでに天保十三年十一月松代藩主真田幸貫への上書でも頑愚の貧國を興した露帝の業績に言及していた。⁽¹⁰⁾ 下田露使応接當時はその状況を勝海舟宛に尋ねた安政元年十一月四日の書翰で、「弥利堅の恐嚇に御怖ぢ、年久しく申出で居り且つおとなしく出かけ候魯西へはけく立派の御挨拶有之候故、魯西人も心よからず存候より、弥利堅の恐嚇に倣ひ候様の義も可有御座敷と杞國の憂に堪へず候」と述⁽¹¹⁾べ蝦夷地への露勢力進出をその現われかと案じている。

この象山に送った吉田松陰の「幽囚録」には、神州に深憂大害をなす米露二國のうち、露都は遠いが東辺は我と一水を隔てるのみで兵艦足りれば来襲すべきを警めている。松陰は安政二年九月、獄中で記した「接魯問答跋」では「魯西亞之抱藏禍心、所⁽¹²⁾由来久矣」としていたが、山縣世衡著「哈喇呼吐略誌」の跋文でも、千島を食し、樺太を攘もうとする貪婪なる露國に対して「幕謀之不遠」を慨歎している。⁽¹³⁾ 安政六年四月野山獄中から北山安世(象山の甥)宛の所見では、「魯夷は大国の風と云ふべきかなれども稍迂濶を覚ふ」と評し、⁽¹⁴⁾ 米國を最強敵と思考しているが、露

国密航の企図を逸した松陰は、夙に北地对露文献を必読と重視していたのである。

新発田藩主溝口直諒は安政四年、簡井政憲宛に、象山と同様な意見を呈し「魯人へ計り手強く断を申て、合衆人へ手弱く扱候とは不都合に相成、魯人も不服、合衆人はいよいよ我邦を輕侮いたし候はゞ、両方共我邦の爲め相成間敷」と露に強く米に弱い扱いぶりの相違の不得策なることを指摘し、「魯西亜人は我邦の武勇強名を心得輕蔑せずして、彼が強大国を以一小国へ兄弟の約を求候義、其心底長く交易を乞ふ爲めの方便、隣好を結ぶ意にも可有之や難計候へども、我国法を守り、援助の情をあらはし候は幸の義、内心の深巧有之や否迄は不及狐疑、御聞届約定固く御取極可然か」と、米露英との貿易許可すべしとの開国論の立場で、此度「魯西亜渡来は幸ひの義」とするが、やはり「異国人を以て異国人を防く御一策」という点で大槻磐溪らと相通ずる外交論であつた。⁽¹⁶⁾

- (1) 通航一覽統輯卷之六十九(譜厄利亞国部六)、箭内健次編『通航一覽統輯』第三卷 七八ページ。
- (2) 幕末維新外交史料集成 第三卷(修好門) 一五二—一五三ページ(各国ノ事情ヲ告ル米國「ホルトメン」内密書横文和解)
- (3) 幕末維新外交史料集成 第三卷 四三四ページ
- (4) 松平春嶽全集 第二卷 二四〇—二四一ページ
- (5) 同前書 二四八ページ。この松平慶永も明治三年六月の建言では蝦夷地開拓の急を説き、「俄羅斯ノ如キ、點虜疆域ヲ接シ、浸潤日ニ迫リ蚕食年々ニアリ、朵頤ノ情深厚可畏懼ノ甚シ」と迅速の対策を要望するに至る。(同書一四四ページ)
- (6) 橋本景岳全集 上巻 五五〇—五五五ページ。なお橋本左内と横井小楠の意見比較は、三上一夫「橋本左内の外交観について―日露同盟論を中心に―」(社会文化史学三三号 昭和四二年) 参照。
- (7) 山崎正薫『横井小楠』下巻 遺稿篇 二四一—二四六ページ
- (8) 増訂象山全集 卷二 補遺二七ページ
- (9) 増訂象山全集 卷四 五八六ページ。安政五年一月二六、梁川星巖宛にも同趣旨(同書六九四ページ)。
- (10) 増訂象山全集 卷二 四六—四七ページ
- (11) 増訂象山全集 卷四 二七五—二七六ページ
- (12) 吉田松陰全集 第一巻 五九五ページ
- (13) 吉田松陰全集 第二巻 三九ページ
- (14) 吉田松陰全集 第二巻 四二—四三ページ
- (15) 宮本伴『佐久間象山』七九四—七九五ページ
- (16) 梅田又次郎『勤王開国の先唱者溝口健齋公』二二—二一九ページ

四

一八六〇年代に入り、極東における英露角逐の形勢は、露艦ボサドニック号の対馬占拠事件にも顕著に現われた。文久元年における露国軍艦の行動は日本国内の対露危機意識を、それまでの北辺蝦夷地方面のみに限らぬものとして、警戒の念を深くさせる一契機となった。

横井小楠は万延・文久の間にも「強兵論」で英露対抗の形勢を説き、露国の黒竜江地方進出に関し、「魯国の日本に通じて慇懃を致し又蝦夷の経界を論ず、其根拠知るべき也。黒竜江は我北蝦夷の薩哈連に隣れば、其馬頭繁盛に到らば諸州の船舶日本海に輻湊して英・魯の戦争も亦数年ならずして日本海面に起らんとする勢あり。此時に當って日本咽喉の地に在て其嚮背大に二国の強弱に關すれば、二国必日本を争ふべければ、日本の危険尤甚しといふべし」と警告し、^①防衛策に海軍を重視しているが、対馬をめぐる情勢も的確に把握して文久元年六月の書翰（在熊本社中宛）では「対馬事件」を日本の大患のみならず、「魯・英之勢不_二兩立_一遂には乱と相成可_レ申」「世界之大患」ともなる事件で、露国の取得した黒竜口は毎年九月結氷するため対馬島入手を要するが、アジアの門関に位置する対馬を英仏に取られては「魯は全く封印を被_レ付候て聊の働きも出来不_レ申甚大關係之地」「魯・英之戦争此処より始り可_レ申哉何とも難_レ被_レ申、深く可_レ恐は対州一条」と、対馬一件の重大性を切言している。^{②③}

英国艦隊の牽制行動で露艦は対馬から退去したが、逆に英国の同島への志向に懸念を示した例として、幕臣大久保忠寛（一翁）が時務策の議論を交わした松平慶永宛（文久三年十月十五日）に、「当今御国一度乱候は、魯喚始うかうか見物計は仕間敷者必然に而、遂には取戻難成事可出来（中略）一朝相始候は、喚仏は速に対老佐所有と可致、^④亞は南七島、魯は蝦を可有」と対馬・老岐には英国、伊豆諸島には米國、蝦夷地には露国の領有意图を惧れ、国内変乱に乗ずる隙を与えぬことを肝要と論じている。

同じく幕臣勝麟太郎（海舟）は、元治紀元の晩冬、長崎で海軍伝習中、露使から黒竜江口などアジアに対する露国の遠図を聞き、「胆識の欧亜を并吞するの氣象」を察し、伝習指導の蘭國海軍士官ベルスレイケンからも露土戦争の意義を説かれ、「後年万般整ひ備はるを得る時は、我北辺もまた今時の独樂兒^{トルコ}の轍のごとくに至らん歟」と案じ、「彼は

海軍を盛大にして、亜細亜を呑むの勢あり、我は萎靡して固守の誦あり」と露国と対比して、我邦の国情を憂えた。⁽⁴⁾

しかし幕末も慶応期以降露国に渡航して実地に見聞する機会に恵まれると対露認識にも単なる畏怖の念と異った点が生じてくる。すでに文久二年八月開港開市延期を使命とした遣欧使節竹内保徳一行が、露国では樺太分界などに關しても談判調印（一八六二年九月）、同年十二月帰国したが、慶応元年には、幕府の露国留学生の派遣が実現した。

慶応元年七月（一八六五年八月）山内作左衛門以下遺露留学生六名が箱館を出発した。これには箱館駐在露国領事ゴシケウィチの箱館奉行に対する勧説があつた。すでに開成所には蘭英仏独と並び魯西亞学が開設されていたが、開成所寄宿寮頭取神田孝平は送別の蘭文に、「露西亞は世界に於ける最大の又最強の国たるのみならず、我が国にとり境を接する唯一の国で、両国の關係が今後益々繁くなるのは明かである。（中略）政府が相互の友好の印として和蘭に次いで露西亞へ留学生を送るのは、この点から考へて必要と決せられたものであらう。」と記していた。⁽⁵⁾

しかるに、この留学生たちに露都で会った森有礼が「幕生衆も魯渡の事を甚だ悔めり」と感じ取つたように、露国の文化は英仏独諸国に比べ遜色あり一行は不満を覚えていた。森は英国留学中、慶応二年八月休暇を利用して露都に遊んで山内ら一行を旅宿に訪れたのであるが、同年六月三日英国から実兄横山安武宛書翰で、「彼の魯国の今要する所の香港を得るに有之、若今日本彼と親交を結ひ候はゞ、不日にして彼必申すへし、英仏其外米國等今頻に日本を呑まんと欲す、故に我は日本に力を合せて之を防ぐへしとて、之を餌にして彼申すへし」「彼未た一の港を得ず故に今竊に猫智を抱き鷲爪を藏して外容頻に神妙を飾り、内には狼心を養ひ只寸間を狙ふ、故に先年我國人一変魯國人を殺せし時もさまで問ひもせず却て我國人を惠遇する事實に著し」と看取し、留学生派遣についても、「彼我國人に魯行を勧むること甚切なり、已に去年幕生七人をして遂に行かしむ、過情斯の如し彼の狼心あること更に云ふに足らん」と厳しい。その国力の評価でも、「世人多く魯國を指て強國とす、強は乃ち強なり、併し眞の強に非ず、英仏米と更に較し難し」と、「セバステポール」敗戦の例など挙げて不強と断定し、また「我國人多く魯國を指して義國といふ、是何ぞ汚なるの甚しき、乃ち土耳其^(トルコ)其奪掠の企て、先年ポーランド國を取りし事跡、又スウイスゼランド國の過半を奪略せし事跡。近くは對馬の件不義不法の働き数へ難し、其上魯の國政皆國論にあらず一切帝より出づ故に不公平の政多し、帝明なれば治國。暗なれば國乱。皆其國人帝を以て神とす、何ぞ愚且不義の甚しきや」と。この露國に

比べて米國を公平正大の政事をなす國と稱し、渡米の意思を洩らしている。

森は露國訪問時の「航魯紀行」慶応二年八月二十三・四日の記事に、「魯は斯る大國を帯ながら猶四方を呑んと欲し終に滿洲等は併せし由、且亦すでにアジアの北方に魯國より黒竜江まで通路をこしらへ、當時二ヶ月を歴て魯都より黒竜江まで達すとなり、今また其半途は汽車道をかけんと欲す、然れば數旬を不過魯都よりわが蝦夷地まで達すべし、恐るべし魯人の世界に一帝たらんと之志心、是皆世人の知る処にして不記して顯然也」とシベリア鐵道計画に觸れ、英露相互の憎惡を指摘し、国民性については「元來實儀にして西洋に而は田舎風」で「万事万物他國より不長」だが、ただ戦争となると「糧は多し兵は多し」で、クリミア戦争のごとく相手國を半途で講和に至らしめる兵數の量に驚目するばかりで、「後世魯は世界の邪魔物歟」と予測し、露國を古く周代の秦に擬している。

最後に、これは旧佐賀藩士久米邦武（天保十年生れ）後年の回想であるが、「余が幼稚の頃は、外國との戦は必ず露西亞を敵とするものと予断され（中略）祖母は余に向い、『此の人も長ずれば阿羅思との戦に討死せねばならぬから、大事に育てねばならぬ』と口癖の様に語り、余も幼心に左様かと思ひ倣して居た⁽⁹⁾」というから、対露意識の根の深さを思い知らされる。この久米も岩倉使節の一員として海外に出て、明治六年露國を實地に觀察すると、その記録に歐洲諸國中「最モ不開ナルヲ露國トス」とし、「東洋人ノ想像ハ殆ト之ニ異ナリ、今ニ至ルマテ日本人ノ露國ヲ畏憚スルコト、英仏ノ上ニ出ツ」⁽¹⁰⁾「露國ノミ最大最強ニテ、常ニ狼視虎歩シテ、世界ヲ并吞スル志ヲ抱クモノナリト謂フカ如キハ、衆口一談、曾テ疑ヲイルルモノナシ、抑此妄想ヲ日本人ノ脳神ニ感觸セルハ、何ノ原因ナルヤ」と推究の筆を開國以前に及ぼし、「文化元年ノ祝砲ニテ、日本鎖國ノ夢ヲ驚破セシ余響ニヨリ、虎狼心ヲ以テ露國ヲ憚ルノ妄想ヲ生シ、兩國人ノ際ニ一ノ奇影ヲ幻出シタルノミ」と顧る。この魯夷・虎狼視は結局幕末を通じ全体として日本人の意識から抜きがたく、明治維新後にも持ち越されたのであった。

(1) 前掲『横井小楠』下巻 遺稿篇 四四ページ

(2) 同前書 三六二ページ

(3) 「大久保一翁文書」(國立國會圖書館憲政資料室蔵写真による)。なお日本史籍協会『続再夢記事』第二(一九八ページ)同文と対照すると「対老佐」は「対岐佐」となっている。

- (4) 海舟全集 第十卷 四五四—四五六ページ (随筆補遺「露国の東漸」の項)
- (5) 内藤達『遣魯伝習生始末』三—六ページ。原平三「我が国最初の露国留学生に就いて」(歴史学研究十卷六号) 参照。
- (6) 山岸光宣「幕末洋学者欧文集解説」二四ページ
- (7) 森有礼「航魯紀行」(大久保利謙編『明治啓蒙思想集』 明治文学全集3所収) 二五〇ページ
- (8) 木村匡「森先生伝」一七一—二二二ページ
- (9) 前掲「航魯紀行」(同前書二四八—二五一ページ)
- (10) 『久米博士九十年回顧録』下巻 四九五—四九六ページ
- (11) 『特命全權大使米欧回覧実記』第四編 一〇三—一〇七ページ (露国国勢論)
- (12) 慶應二年十月、中岡慎太郎は尊攘論の立場で、「今時恐るべきものは魯なり。今虎狼の心を包蔵し、数年来大兵を養ひ、国用を儲蓄し、石炭を用意し、諸国に交易を意とせず。彼の策をして起たしめば必ず突然侵略、その恐れあるは我朝を以て甚しとす、清之に次ぐ」と見ている。(平尾道雄「明治を予言したもの—中岡慎太郎の時勢論—」日本歴史二四八号)

結

幕末の対外論は当初北辺の警報に専ら露国を対象としていたのが、他国の来航を迎えると、対英・対米策と併せ論ぜられるようになる。露国の進出に伴う事件の発生に触発されて種々議論を見るが、北境に接する隣国なるが故に一面警戒を強めると共に、他面和親論も生じた。ただ親露論といえどもその底に恐露の念を蔵した「以夷制夷」の策として唱えられることが多かった。露国を世界一の大国と目しての立論で、とくにビョートル大帝の偉業が識者に強く印象づけられている。それは文献上の知識を主とした所で、実地に露国を見聞するに及んで、この恐露説・大国観が修正されたとしてもなお一部に限られていた。それゆえ明治時代に入っても依然警戒論は強調されるが、幕末・明治初年を通じて、英米各国の使臣らが露国との対抗上、入説した点も見のがせない。処士の議論と異り、一国を代表して談判に臨んだ米國ハリス、英國スターリングの幕吏への言明は、後年の英国パークス公使の明治政府当局者に対する忠告と同様、列国極東政策の環の中に日本が位置している事実を強く認識させたに違いない。